氏　　名	齋　藤　祥　乃
学位の種類	修　士（看護学）
学位記番号	修　士　第　１４１　号
学位授与年月日	平成２３年３月１０日
学位論文題目	分娩後の骨盤内臓器復古における骨盤ベルトの有用性

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	146	(ふりがな) 氏　　名	さいとう　よしの 齋藤　祥乃
修士論文題目	分娩後の骨盤内臓器復古における骨盤ベルトの有用性		

【研究の目的】

本研究の目的は、分娩後の女性において、骨盤ベルトの安全性と有用性を検証することである。推奨されている恥骨結合上での骨盤ベルト着用では、骨盤内臓器を下垂させないこと、また、子宮復古を促進し、マイナートラブルを減少させることを仮説とし、解剖学的評価および主観的評価の視点から明らかにすることである。

【研究方法】

妊産褥婦の５人に１人（有限会社、青葉算出）が使用しているＡ社製品の骨盤ベルトを使用し、以下を検証した。なお、骨盤内臓器の位置・形状は、縦型オープンMRにより評価した。

1. 分娩の経験を有する一般女性11名を対象とし、骨盤ベルト非着用、上前腸骨棘上の着用、恥骨結合上の着用における内子宮口および膀胱頚部の位置を比較した。
2. 分娩後の女性11名を対象とし、骨盤ベルトの着用部位を恥骨結合上として、着用の有無による内子宮口および膀胱頚部の位置を比較した。
3. 骨盤ベルト着用群30名と非着用の対照群11名を対象とし、分娩後１週間、１か月、２か月の各時点における内子宮口の位置、子宮最大断面積、悪露の性状変化、マイナートラブルの発症数、腰痛の発症数と程度を比較検討した。

【結果】

1. 一般女性において、恥骨結合上での骨盤ベルト着用は、内子宮口および膀胱頚部の位置を下垂させず、むしろ挙上させ、反対に上前腸骨棘上の骨盤ベルト着用では、骨盤内臓器を下垂させる可能性が示された。
2. 分娩後の女性において、骨盤ベルト着用は、分娩後１週間、１か月、２か月のいずれの時点においても、内子宮口および膀胱頚部の位置を下垂させないことが示された。
3. 骨盤ベルト着用群の内子宮口の位置は、分娩後１か月において、対照群と比較して下降が促進されることが示された。しかし、子宮最大断面積、マイナートラブル、腰痛の発症数と程度は、着用群と対照群には差がないことが示された。

【考察】

一般女性および分娩後の女性において、恥骨結合上での骨盤ベルトの着用は、内子宮口および膀胱頚部を下垂させないことが示された。この背景には、骨盤ベルト着用時の骨盤傾斜角の減少と、骨盤出口部位の軟部組織圧の上昇による骨盤臓器脱防止メカニズムの作用、および骨盤底筋群を収縮させた状態での骨盤ベルト着用が影響していると考えられる。分娩後の骨盤ベルトの着用により、子宮口の位置は、分娩後１週間から１か月に下降が促進された。これは、骨盤ベルト着用が、重力に拮抗する骨盤底の筋緊張の緩和と安静が保持されたため、分娩侵襲からの生理的な復古が促進されたと推察された。以上のことから、復古現象には影響を及ぼさなかったと考えられる。

【総括】

骨盤ベルトの推奨位置である恥骨結合上での着用において、骨盤内臓器の下垂が認められなかったことから、骨盤ベルトの安全性は実証された。また、着用群において分娩後１週間から１か月の内子宮口の下降が促進されたことから、骨盤ベルトの有用性は実証された。一方、主観的評価は、着用群と対照群で差が認められなかったが、安全性と有用性が検証されたことから、育児中の女性にとって、安全で簡便な看護ケアとして骨盤ベルトは有用であると考える。

（備考）１．研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1200字程度）
　　２．※印の欄には記入しないこと。